

日本語とハングル資料

— 沖縄語史とハングル資料 —

多和田眞一郎*

目次

- I 日本語に関するハングル資料
 - II 沖縄語に関するハングル資料
 - III 日本語ハングル資料と沖縄語ハングル資料の違い
 - 1. 日本語ハングル資料における「エ段音」の用字
 - 2. 「語音翻訳」(1501)における「エ段音」の用字
 - 3. 「漂海録」(1818)における「エ段音」の用字
 - IV ハングル資料によって明らかになった沖縄語史の一例＝有声子音の前の鼻音＝
-
-

「朝鮮」王朝時代の人々が、ハングルを用いて、どのように外国語を表記したかという観点から、沖縄語ハングル資料の吟味を行い、その資料的価値について考察する。

I、日本語に関するハングル資料

今までに研究されている、主な日本語ハングル資料として次のようなものがある。

- 1、『伊路波』（1492年刊）
- 2、『捷解新語』（原刊本）（1676年刊）
- 3、『改修捷解新語』（1748年改版）
- 4、『重刊改修捷解新語』（1781年改版）

* 広島大学教授

- 5、『倭語類解』 (1705年前後刊)
- 6、『方言類積』 (1778年刊)

Ⅱ、沖縄語に関するハングル資料

- ☆ {翻} 『海東諸国紀』 付載の「語音翻訳」 (1501)
- ☆ {漂} 『琉球・呂宋漂海録』 中の「言語」「琉球」語 (1818)

Ⅲ、日本語ハングル資料と沖縄語ハングル資料の違い

「エ段音」に焦点を当てた分析をもとにその違いを明らかにする。以下のハングル表示は、転写字によって行うこととする¹⁾。

1、日本語ハングル資料における「エ段音」の用字

前掲の日本語ハングル資料は、ともに「朝鮮」王朝時代の日本語教科書・学習書・辞書である（この観点が必要であることについては多和田 (1997) で触れたことがある）。ところが、ある意味では不思議なことに、これまでの研究はこの点に注目しなかったよ

1)ハングルは、転写字で示す。以下のとおりである。日本語ハングル資料もこれに準じる。音節と音節の間に「・」を入れる。

{翻} (1501) の場合
(母音字)

ㅣ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅣ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ
i	joi	jo	ui	ai	ai	a	u	o	Λ	u	ja	ju	jo	oai	oa	ui	oi			

(子音字)

ㅇ	ㄱ	ㅋ	ㅌ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ
'	k	kh	t	th	st	p	ph	s	c	ch	z	m	n	r	w	ㅍ				

{漂} (1818) の場合
(母音字)

ㅣ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅣ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ	ㅅ
i	joi	oi	jo	o	ui	ai	ai	a	u	o	Λ	u	ja	ju	jo	oa	oi	uo		

(子音字)

ㅇ	ㄱ	ㄱ	ㅋ	ㅌ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ	ㅍ
'	k	kk	kh	t	tt	th	p	pp	ph	h	s	c	cc	ch	z	m	n	r	ㅍ	

うな印象を受ける。単純に「言語資料」として扱っており、教育的観点からの工夫がなされている、あるいは編集が行われている資料であるという観点が希薄であったように見受けられる。

日本語教科書・学習書・辞書であるという特徴を念頭に置きつつこれらの資料を綿密に・実証的に、そして総合的に研究し成果をあげたのが、趙炯熙 (2001) である。

また、多和田(2003)では、日本語ハングル資料と沖縄語ハングル資料の資料的性格の違いを、「規範的立場(教育的立場)」と「記述的立場(観察的立場)」という言い方を援用することで、説明している。

趙炯熙 (2001) によると、日本語ハングル資料のエ段音表記に関して、以下のようにまとめることができる。

- ① 『伊路波』・『捷解新語』(原刊本)・『方言類積』のエ段音節母音部表記
「jo」はn一環境で現れ、「joi」はその他の環境で現れる。これは、njoiの場合、朝鮮語の干渉でnが脱落しやすいので、それを避けるための工夫である。
- ② 『捷解新語』・『改修捷解新語』のエ段音節母音部表記
「joi」への改修が行われている。
- ③ 『重刊改修捷解新語』のエ段音節母音部表記
全ての音注が「joi」の方に統一されている。
- ④ 『倭語類解』のエ段音節母音部表記
「jo」の代わりに「oi」を用いる。その趣は他の学習書と同様である。

以上で明らかなように、どの資料に関しても教科書・学習書・辞書という「教育的配慮」による工夫・編集が行われている。

沖縄語ハングル資料のほうはどうであろうか。(なお、用例の後に付されている数字は、「語音翻訳」及び「漂海録」の項目につけた通し番号であって、それを示すことで用例数を示そうとしている。)

2、「語音翻訳」(1501)における「エ段音」の用字

「え」ナシ/「け」さけsa·ku i (17, 18, 19, 23, 70, 72, 74, 75, 76)、けふkhjo·'o(56)/「げ」あげら'a·ku i·ra (17)、あげもの'a·kui·mo·ro<no>(13)/「せ」こせうkho·sju(94)、さんせうsan·si·'o(95)/「ぜ」かぜkhan·cui(41)、たんぜいthan·chjɔŋ(157)/「て」あさて'a·sat·ti(59)、つとめてsto mui ti(43)、みななりてmi·na·rat<nat>·ti(23)、はれてphi<pha>·rit ti(37)、ゑひて'i'u ti(76)/はれてpha·ri tjoɪ(33)、ふりてphut·tjoɪ(34)、はれてpha·rit·tjoɪ(35)、あがりて'aŋ·kat·tjoɪ(39)、くもりてku·mo·tjoɪ(32)、ふてつpu·tjoɪ·c*(17)/てnthjɔŋ(31)(32)(33)、てんだう(?)thjɔŋ·ta(38)(39)/いりて'is·cjoɪ(40)、きてkit·cjoɪ(11)、たちてtha·cjoɪ(8)、that·cjoɪ(9)/「で」ナシ/「ね」なだねnan·ta·ri<ni>(93)/ねんnjɔŋ(62)/あね'a·raɪ<nɪ>(6)/「へ」おはちへ

(?) 'oai·chjo(24)/ へる pui·ru(98)/ 「べ」あそべ 'a·sΛm·pi(24)/ なべna·pui(130)、はべらぬ(?)rja·pui·ran(16)、ゆふべ 'jo·sam·pui(45)/ 「め」こめkho·mjoi(80)/ あめ 'a·mui(34)(35)、つとめてsto·mui·ti(43)、こめko·mui(83)/ めmui(143)/ 「れ」はれてpha·ri·tjoi(33)、pha·rit·tjoi(35)/ すれsΛ·rjoi(79)/ あれ'a·rui(21)、これku·rui(28)/ 「ゑ」ゑひて 'i·'u·ti(76)

これらを「エ段音」の用字に関して整理すると次のようになる。

- {1} i 「ti」(さ)て(59)、(め)て(43)、(ひ)て(76)、(り)て(23)、(れ)て(37)、「ri<ni>」ね(93)、「pi」べ(24)、「i」ゑ(76)
- {2} joi 「tjoi」(り)て(32)(34)(39)、(れ)て(33)(35)、「cjo i」(き)て(11)、(ち)て(8)(9)、(り)て(40)、「mjoi」め(80)、「rjoi」(す)れ(79)
- {3} jo 「thjo」て(31、32、33)(38、39)、「njo」ね(62)、「chjo」(ち)へ(24)、「chjoŋ」ぜい(157)
- {4} ui 「ku i」け(17、18、19、23、70、71、72、74、75、76)、「kw i」げ(13)(17)、「cw i」ぜ(41)、「pui」へ(98)、「pui」べ(16)(45)(130)、「mui」め(34、35)(83)(143)、「rui」れ(21)(28)
- {5} ui 「mui」め(143)
- {6} Λ i 「rΛ i<nΛ i>」ね(6)
- {7} ju 「sju」せう(94)
- {8} i·'o 「si'o」せう(95)

{7} {8} は長音表記となっているもので、ここでは対象外となる。{3} は、「朝鮮」語(漢字語)の干渉の可能性が高い。「天thjoŋ」「丹精than·chjoŋ」である。ただし、(24)の「chjo」は保留とする。{5} の「mui」は鼻音の「m」が「u」を誘発したと見る。

このように見てくると、「語音翻訳」の「エ列音」表記字は「-i」「-joi」「-ui」「-Λi」四種類になるが、明確な意図のもとに書き分けが行われた痕跡は認められない。その時その時の聞こえのままに表記したとしか考えられない。

3、「漂海録(1818)における「エ段音」の用字

「え」ナシ/「け」ナシ/「げ」ナシ/「せ」きせる si·ri(62)、せうくわん sjo·koan(7)、せうちう sjo·cu(65)、ばせう ma·sa(p.28、15) / 「ぜ」かぜ kan·'ui(29) / 「て」いねて 'i·nai·tsi(25)、-て scin(81)、ci(111)、ふてつ stΛs / 「で」ふで hu·tu i(95) / 「ね」いねて 'i·nai·tsi(25)、くねんぼ kun·hui·pu(56)、たね tin<tan>·'Λ i(19)、ふね hu·nui(93) / 「へ」かへら khoi·ra(91) / 「べ」ナシ/「め」こめ ku·

mi(55) / 「れ」いまりめしおはれ main·so·'o·r i (18) 、をどれ 'u·tu·'i·ri(28) / 「ゑ」ナシ

以上を「エ段音」の用字に関して整理すると次のようになる。

- <1> i 「si」(き)せ(62)、「tsi」(ね)て(25)、「sci」(ち)て(111)、「ci」(き)て(111)、「mi」め(55)、「ri」れ(18)(28)
- <2> oi 「khoi」かへ(91)
- <3> jo 「sjo」せう(7)(65)
- <4> ui 「'ui」ぜ(29)、「tui」で(95)、「n·hui」ね(56)、「nui」ね(93)
- <5> ʌ 「st ʌ s」(ふ)て(つ) (81)
- <6> ʌi 「nʌi」ね(25)、「n 'ʌi」ね(19)

<3>は長音表記なので、ここでは考察の外に置かれる。そうすると、「エ段音」の用字としては「i」「oi」「ui」「ʌ」「ʌi」の五種類となるが、書き分けがあるとは判断できない。ましてや、「e から i への移行」などを考えて「i」に統合するといった操作が行われたなどということもありえない。ここでも、「語音翻訳」の場合と同様、その時その時の聞こえのままに表記したとしか考えられない。

以上見てきたことで、代表的な日本語ハングル資料と沖縄語ハングル資料の資料的性格の違いが明確になった。考察の対象をいかなる立場で見るかに関しての「規範的立場(教育的立場)」と「記述的立場(観察的立場)」という言い方を借りれば、日本語ハングル資料が前者であり、沖縄語ハングル資料が後者であることが示されたのである。

これは、それぞれの資料に対する分析態度も自ずと違わなければならないことを物語るのである。

IV、ハングル資料によって明らかになった沖縄語史の一例 = 有声子音の前の鼻音 =

この発端は、ハングルの表記法にある。音声としての有声子音は存在するが、そのみを表記する文字は、「Δ(z)」を除いて、用意されていないので、日本語の有声子音を表記するのに無声子音を示すハングル「k、t、c、p」の前に鼻音の「ŋ、n、m」を先行させて示すとされてきている。伊波普猷もこの考えに従って {翻} (1501) を分析した²⁾。その影響が強すぎたのか、誰も問題にせず過ぎてきた。

2) 「朝鮮語には殆ど濁音がない為に、直前の音節の語尾に、ㄴ(n)、ㅇ(ŋ)、ㅇ(m)の何れかを付けて、次の文字

まず問われるべきは、日本語ハングル資料と沖縄語ハングル資料の違いである。これについては前述した。この観点に立って {翻} の「無声子音を示すハングルの前に鼻音を示すハングルが存在する」表記を丹念に調べ上げた結果、「有声子音の前に鼻音が実際に存在した」³⁾ことが実証された。

同じように漢字資料・アルファベット資料も分析し⁴⁾、その結果を一覧表にして示すことにするが、その前に、語例提示と音訳漢字の音価推定を行う。

< 語例 > 「/」は用例なし。

- ①しやうが (生姜) {翻} sja · 'oŋ · ka, {館} 「/」, {使} 「/」, {字} /」, {信} 焼介、{見} 芍略、{クリ} 「/」, {漂} 「/」
- ②あふぎ (扇) {翻} 「/」 {館} 昂及、{使} 昂季、{字} 枉基、[信] ヲ吉、枉基、{見} 窩吉、{クリ} ojee, {漂} 'o · ci
- ③うさぎ (兎) {翻} 'u · saŋ · ki, {館} 烏撒及、{使} 吾撒急、{字} 吾撒急、{信} 兀殺吉、{見} 「/」, {クリ} 「/」, {漂} 「/」
- ④むぎ (麦) {翻} 「/」, {館} 蒙乞、{使} 蒙巳、{字} 皿其、{信} 「/」, {見} 「/」, {クリ} 「/」, {漂} 「/」
- ⑤をぎ (荻、甘蔗) {翻} 「/」, {館} 翁及、{使} 翁急、{字} 翁急、{信} 翁吉、{見} 「/」, {クリ} ojee, {漂} 'uk · 'i
- ⑥あげ～ (上げ～) {翻} 'a · kwi · ra, 'aŋ · kwi · ri, {館} 阿結的、昂乞立、{使} 阿傑的、阿傑約、昂乞利、{字} 安急弟 {信} 阿傑的 {見} 「/」 {クリ} 「/」 {漂} 「/」
- ⑦をなご (女子) {翻} 「/」, {館} 「/」, {使} 「/」, {字} 倭男姑、烏男姑、{信} 会南姑、{見} 烏那姑、{クリ} innago, {漂} 'u · na · kui
- ⑧くじやく (孔雀) {翻} 「/」, {館} 公少、{使} 「/」, {字} 枯雀姑、{信} 姑雀姑、{見} 「/」, {クリ} 「/」, {漂} 「/」
- ⑨かぜ (風) {翻} k han · cwi, {館} 嗑集、{使} 監濟、嗑濟、{字} 嗑濟、{信} 咯買子、咯買、{見} 哈子、噶子、{クリ} kassee、kazzee {漂} kan · 'ui

を濁った」『伊波普猷全集』第四卷(1974)平凡社 p.55

3) 詳しくは、多和田(1997)(p.53-56)参照。

4) 分析の対象とした資料の一覧を示す。{ } は、用例を示す際に使用する略号である。

- ☆ {翻} 語音翻訳(1501)…『海東諸国紀』付載のハングル資料
- ☆ {館} 琉球館訳語(16世紀前半成立か)…『華夷訳語』の一つとしての漢字資料
- ☆ {使} 陳侃『使琉球録』中の「夷語」(1534)…漢字資料
- ☆ {字} 周鐘 等『音韻字海』中の「附録夷語音積」「附夷字音積」(1572頃)…漢字資料
- ☆ {信} 徐葆光『中山伝信録』中の「字母」「琉球語」(1721)…漢字資料
- ☆ {見} 潘相『琉球入学見聞録』中の「土音」「字母」(1764)…漢字資料
- ☆ {クリ} クリフォード琉球語彙(1818)…アルファベット資料
- ☆ {漂} 『琉球・呂宋漂海録』中の「言語」「琉球」語(1818)…ハングル資料

- ⑩すずり (硯) {翻} sa·ca·ri, {館} 孫思立、孫司立, {使} 孫思利, {字} 孫司利, {信} 思子里, {見} 息子利, {クリ} 「/」, {漂} 「/」
- ⑪ぼうず (坊主) {翻} 「/」, {館} 包子, {使} 鮑子, {字} 褒子, {信} 巴子, {見} 「/」, {クリ} bōdsee、bōdzee, {漂} 「/」
- ⑫ひだり (左) {翻} 「/」, {館} 分達立, {使} 分達里, {字} 分達里, {信} 分搭里, {見} 虚搭歴, {クリ} feejeeree, {漂} 「/」
- ⑬かぢ (舵) {翻} 「/」, {館} 看失, {使} 看失, {字} 看息, {信} 看失, {見} 哈帯, {クリ} kassee, {漂} 「/」
- ⑭みづ (水) {翻} 「/」, {館} 民足, {使} 民足, {字} 民足、子, {信} 閔子、子, {見} 媚吉、蜜子、梅子, {クリ} meezee, {漂} mi·tui
- ⑮ふで (筆) {翻} phun·ti, {館} 分帖, {使} 分帖, {字} 忿嚏, {信} 夫的, {見} 弗的, {クリ} hoo·dee, {漂} hu·tui
- ⑯まど (窓) {翻} 「/」, {館} 慢多, {使} 慢多, {字} 「/」, {信} 馬都, {見} 麻毒喀, {クリ} 「/」, {漂} 「/」
- ⑰もどり (戻り) {翻} 「/」, {館} 慢多罽, {使} 慢多羅, {字} 悶都里, {信} 閔都里, {見} 木毒利, {クリ} moodoeng, {漂} 「/」
- ⑱おばに (御飯) {翻} 'o·pa·ri<ni>、'om·pa·ri<ni>、'o·pan·ri<ni>, {館} 翁班尼, {使} 翁班尼, {字} 汪班尼、汪班泥, {信} 唔班, {見} 翁班, {クリ} umbang、oombang, {漂} 「/」
- ⑲おび (帯) {翻} 「/」, {館} 「/」, {使} 文必、必, {字} 文, {信} 文筆、烏必, {見} 烏比、烏必, {クリ} obee {漂} 「/」
- ⑳くび (首) {翻} 「/」, {館} 「/」, {使} 「/」, {字} 空為, {信} 枯必、科必, {見} 「/」, {クリ} coobee, {漂} 「/」
- ㉑あそび (遊び) {翻} 'a·sam·pi, {館} 烏孫必, {使} 烏遜皮, {字} 「/」, {信} 「/」, {見} 「/」, {クリ} 「/」, {漂} 「/」
- ㉒ねぶり (眠り) {翻} 「/」, {館} 眠不立, {使} 眠不里, {字} 眠不里, {信} 「/」, {見} 「/」, {クリ} 「/」, {漂} 「/」
- ㉓びやうぶ (屏風) {翻} 「/」, {館} 飄布, {使} 飄布, {字} 飄布, {信} 飄布, {見} 妙不, {クリ} 「/」, {漂} 「/」

有声子音の前の音節に限定して、その用字に関する表を作成すると以下ようになる。

＜有声子音の前の音節の用字に関する表＞

	翻	館	使	字	信	見	クリ	漂
①しやうが	'oŋ	「/」	「/」	「/」	焼	芍	「/」	「/」
②あふぎ	「/」	昂	昂	枉	枉、Υ	窩	o	'o
③うさぎ	saŋ	撒	撒	撒	殺	「/」	「/」	「/」
④むぎ	「/」	蒙	蒙	皿	「/」	「/」	「/」	「/」
⑤をぎ	「/」	翁	翁	翁	翁	「/」	「/」	'u
⑥あげ～	'aŋ、'a	昂、阿	昂、阿	安	阿	「/」	「/」	「/」
⑦をなご	「/」	「/」	「/」	男	南	那	Na	na
⑧くじやく	「/」	公	「/」	姑	姑	「/」	「/」	「/」

⑨かぜ	khan	嗑	監, 嗑	嗑	嗑 (賈)	哈, 噶	ka	(kan)
⑩すずり	sA	孫	孫	孫	思	息	/	/
⑪ぼうず	/	包	鮑	褒	巴	/	bo	/
⑫ひだり	/	分	分	分	分	虚	fee	/
⑬かち	/	看	看	看	看	哈	ka	/
⑭みづ	/	民	民	民, 皿	血, 閔	媚, 蜜, 梅	me e	mi
⑮ふで	phun	分	分	忿	夫	弗	ho o	hu
⑯まど	/	慢	慢	/	馬	麻	/	/
⑰もどり	/	慢	慢	悶	悶	木	mo o	/
⑱おばに	'om,'o	翁	翁	汪	唔	翁	/	/
⑲おび	/	/	文, 丈	文	文, 烏	烏	/	/
⑳くび	/	/	/	空	枯, 科	/	coo	/
あそび	sAm	孫	遜	/	/	/	/	/
ねぶり	/	眠	眠	眠	/	/	/	/
びやうぶ	/	飄	飄	飄	飄	妙	/	/

音訳漢字の音価推定5)。(☆は、その漢字がその資料に「見当らない」意である。ただ

5) 音訳漢字の音価推定に関して、次のような資料を参照する。

{館} (16C前半か)・{使} (1534)・{字} (1572頃)に関しては、『中原音韻』(1324)・『西儒耳目資』(1626)・『東国正韻』(1447-48)・『訓蒙字会』(1527)を参照する。

{信} (1721)・{見} (1764)に関しては、『中原音韻』・『朴通事諺解』(1677)・『老乞大諺解』(1795)を参照する。

漢字資料の詳しい用字例については、多和田(1998)参照。

(注)

- ・『中原音韻』(1324)
二巻。元の周德清の編。主に華北・華中の言葉に基づいた韻引きの字書である。
- ・『西儒耳目資』(1626)
イエズス会の宣教師ニコラス・トリゴール (Nicolas Trigault 金尼閣) の著したローマ字表記による韻引きの字書で、明末北方漢語の実態を写す資料とされる。
- ・『東国正韻』(1447-48)
朝鮮王朝世宗時代に申叔舟・崔恒・成三問等が王命により編纂した音韻書である。当時の朝鮮漢字音を反映したものではないとして忌避される傾向にあるが、15世紀の朝鮮で、その漢字がどのような(中国)音を有すると思われるかを示すものであって(扱いには慎重であるべきであるか)、その観点からは有用だと考えられる。
- ・『訓蒙字会』(1527)
朝鮮王朝中宗の時代に崔世珍が著したもので、漢字3360字に発音と意味を書いて、子供達に教えようとした漢字初歩の学習書である。
- ・『朴通事諺解』(1677)
朝鮮王朝肅宗の時代に権大連・朴世華等が、当時の中国語学習書であった『朴通事』を翻訳・編纂したものである。
- ・『老乞大諺解』(1795)
朝鮮王朝正祖の時代に李洙が、重刊本「老乞大」にハングルの翻訳をつけた会話体の中国語学習書である。「老乞大」は、高麗時代から伝えられる中国語学習書であるが、著者・年代は未詳である。

し、目的の字が見つからない場合は、参考として、同音と考えられる漢字とその音を示すことに努める。)

音訳字	中原音韻	西儒耳目資	東国正韻	訓蒙字会	推定音価	備考
② 昂	aŋ	gam	ŋaŋ	柳 'aŋ	auŋ	{館}{使}
枉	iuaŋ	uam	☆	'oaŋ	auŋ	{字}
③ 撒	sa	sa	san,sar?	san	saŋ	{館}{使}{字}
④ 蒙	muəŋ	mun,man, c'hum	moŋ	朦moŋ	muŋ	{館}{使}
皿	miəŋ	mim	☆	☆	miŋ	{字}
⑤ 翁	oŋ	um	?oŋ	'oŋ	wəŋ	{館}{使}{字}
⑥ 昂	→前出					{館}{使}
阿	a,ə	o	?a'	'a	a	{館}{使}
安	an	gan	?an	案 'an	aŋ	{字}
⑦ 男	nam	nan	☆	nam	naŋ	{字}
⑧ 公	koŋ	kun	koŋ	koŋ	kun	{館}
枯	k'u	k'u	kho'	ko	ku	{字}
⑨ 嗑	ko	ho	蓋 har	榼 hap	ka	{館}{使}{字}
監	kan	☆	☆	☆	kən	{使}
⑩ 孫	suən	sun	son	son	sun	{館}{使}{字}
⑪ 包	pau	p'ao,pao	☆	袍 pho	bau	{館}
鮑	p'au	☆	☆	☆	bau	{使}
褒	pau	☆	☆	☆	bau	{字}
⑫ 分	fən	fuen	pən, ppan	pun	φun(?)	{館}{使}{字}
⑬ 看	ka'n	k'an	khan	kan	khan	{館}{使}{字}
⑭ 民	miən	min	min	min	min	{館}{使}{字}
血						{字}(皿の誤記)
⑮ 分	→前出					{館}{使}
忿	fən	分 fuen	分pən, ppan	分 pun	φun	{字}
⑯ 慢	man	man	man	漫man	man	{館}{使}
⑰ 慢	→前出					{館}{使}
悶	mən	☆	☆	☆	mən	{字}
⑱ 翁	oŋ	um	?oŋ	'oŋ	om	{館}{使}
汪	iuəŋ	☆	☆	'oaŋ	om	{字}
⑲ 文	wən	☆	☆	☆	əm	{使}{字}
丈						{使}(文の誤記)
⑳ 空	k'oŋ	☆	☆	☆	kum	{字}
遜	suən	sun	son	son	sum	{館}{使}
眠	mien	mien	mjon	mjon	nim	{館}{使}{字}
飄	p'ieu	piao	pjow	phuŋ	bjau	{館}{使}{字}

音訳字	中原音韻	朴通事諺解	老乞大諺解	推定音価	備考
① 燒	ʃieu	sjao,sjaw	☆	ʃo:ŋ	{信}
芍	ʃiau,ʃio	☆	☆	ʃo:	{見}
② 枉	iuəŋ	'oaŋ,ʃoaŋ	'oaŋ	o:ŋ	{信}
丫	ia	'ja	☆	o:	{信}
窩	uo	☆	☆	o:	{見}
③ 殺	ʃa,ʃai	sa,sa?	sa,sa?	sa	{信}
⑤ 翁	oŋ	☆	☆	wuŋ	{信}
⑥ 阿	a,ə	'a	'a,ʃa	a	{信}

⑦ 南	nam	nan	nan	naŋ	{信}
那	na	na	na,no,nɔ	na	{見}
⑧ 姑	k'u	☆	☆	ku	{信}
⑨ 喀	k'o	☆	☆	ka	{信}
哈	ha	☆	☆	ka	{見}
噶	葛 ko	☆	☆	ka	{見}
⑩ 思	sī	☆	sw,suz	sɪ	{信}
息	siəi	☆	☆	si	{見}
⑪ 巴	pa	把 pa	芭 pa	bo:	{信}
⑫ 分	fən	☆	βun,ββun	φin	{信}
虚	hiu	☆	☆	φi	{見}
⑬ 看	k'an	☆	☆	kan	{信}
哈	→前出				{見}
⑭ 血					{信} (皿の誤記)
閔	miən	☆	☆	min	{信}
媚	muəi	眉 mui	☆	mi	{見}
蜜	miəi	mi	mi,mi?	mi	{見}
梅	muəi	☆	mui	mi	{見}
⑮ 夫	fu	eu	☆	φu	{信}
弗	fu	☆	☆	φu	{見}
⑯ 馬	ma	ma	ma	ma	{信}
麻	ma	ma	ma	ma	{見}
⑰ 闕					{信} (闕の誤記)
木	mu	mu,mu?	mu,mu?	mu	{見}
⑱ 唔	u	五 'u	五 'u	u	{信}
翁	→前出				{見}
⑲ 文	→前出				{信}
烏	u	'u	'u	u	{信} {見}
⑳ 枯	→前出				{信}
科	k'o	☆	☆	ku	{信}
飄	p'ieu	☆	風 ɕuŋ	bju:	{信}
妙	mieu	mjao,mjaɛ	☆	bju:	{見}

音節末の鼻音の有無による表を作ると、以下のようになる。

＜有聲子音の前の音節末の鼻音の有無に関する表＞

	翻	館	使	字	信	見	クリ	漂
①しやうが	○	「/」	「/」	「/」	×	×	「/」	「/」
②あふぎ	「/」	○	○	○	○、×	×	×	×
③うぎ	○	×	×	×	×	「/」	「/」	「/」
④むぎ	「/」	○	○	○	「/」	「/」	「/」	「/」
⑤をぎ	「/」	○	○	○	○	「/」	「/」	×
⑥あげ～	○、×	○、×	○、×	○	×	「/」	「/」	「/」
⑦をなご	「/」	「/」	「/」	○	○	×	×	×
⑧くじやく	「/」	○	「/」	×	×	「/」	「/」	「/」
⑨かぜ	○	×	○、×	×	×	×	×	(○)

⑩すずり	×	○	○	○	×	×	「/」	「/」
⑪ぼうず	「/」	×	×	×	×	「/」	×	「/」
⑫ひだり	「/」	○	○	○	○	×	×	「/」
⑬かぢ	「/」	○	○	○	○	×	×	「/」
⑭みづ	「/」	○	○	○	○	×	×	×
⑮ふで	○	○	○	○	×	×	×	×
⑯まど	「/」	○	○	「/」	×	×	「/」	「/」
⑰もどり	「/」	○	○	○	○	×	×	「/」
⑱おばに	○, ×	○	○	○	×	○	「/」	「/」
⑲おび	「/」	「/」	○	○	○, ×	×	「/」	「/」
⑳くび	「/」	「/」	「/」	○	×	「/」	×	「/」
あそび	○	○	○	「/」	「/」	「/」	「/」	「/」
ねぶり	「/」	○	○	○	「/」	「/」	「/」	「/」
びやうぶ	「/」	×	×	×	×	×	「/」	「/」

「○」は鼻音あり。「×」は鼻音なし。「/」は用例なし。

用例を見れば、一目瞭然で、全て、所謂「語中」の場合である。所謂「語頭」の場合は、鼻音が存在しない。そもそも「語頭」が有声音である例が少ないのであるが、「語音翻訳」の「門zjo」「身子to·'u(胴、体)」が、その例となる。このことも含めて、鼻音の消失時期を巡って(上記の限りでは16世紀半ば以降に設定できそうであるが)、更に詳しい分析をしていく必要がある。

【参考文献】

- 多和田眞一郎 (1997) 『外国資料を中心とする沖縄語の音声・音韻に関する歴史的的研究』 武蔵野書院
- (1998) 『沖縄語漢字資料の研究』 溪水社
- (2001) 「沖縄語の音声・音韻の変化過程」 『広島大学留学生センター紀要』 第11号
- (2003) 「沖縄語ハングル資料吟味」 『第4回「沖縄研究国際シンポジウム」ヨーロッパ大会 世界に拓く沖縄研究』
- (2004) 「沖縄語音韻史—口蓋化・破擦音化を中心として—」 『音声研究』 第8巻第2号
- 趙燭熙 (2001) 『朝鮮資料による日本語音声・音韻の研究』 ジェイエンス

要 旨

「規範的立場」で編集された日本語ハングル資料と「記述的立場」で記録された沖縄語ハングル資料とは、その性格が異なる。後者の特性が発揮されたものとして「有声子音の前の鼻音」の表記を上げることができる。

例えば、「語音翻訳」(1501)を精査すると、「'u · saŋ · ki (兎)」「phun · ti (筆)」のように表記され、1500年前後の沖縄語では、「有声子音の前」に「鼻音」が存在していたことがわかる。これは、同時期の中国語資料(漢字資料)の様相とも照応し、沖縄語音韻史における重要な資料を提供することになる。と同時に、ハングル資料の価値を示すことでもある。

キーワード： ハングル資料、沖縄語史、漢字資料、
有声子音の前の鼻音、規範的立場、記述的立場

투 고 : 2008. 2. 29
1차 심사 : 2008. 3. 15
2차 심사 : 2008. 3. 29

住 所 : (733-0812) 広島市西区己斐本町3-1-6-812
電 話 : 082-273-4912
e-mail : tawata@hiroshima-u.ac.jp